

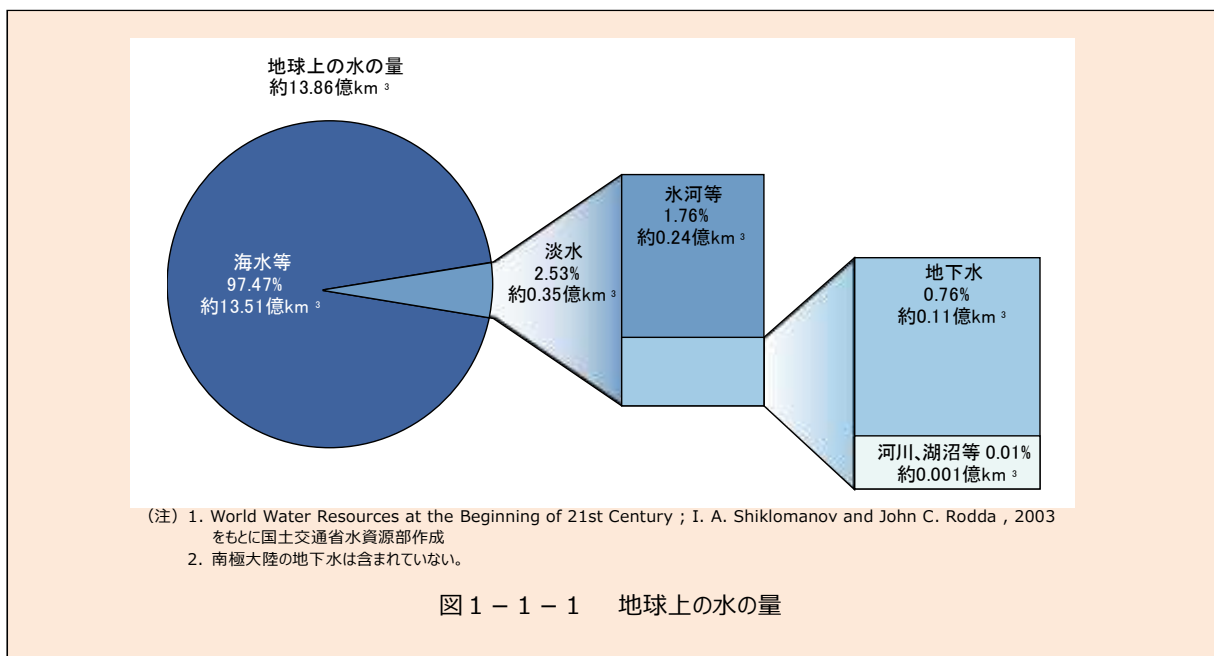
## 日本の水資源の現況

### 第1章

### 水の循環と水資源の賦存状況

#### 1 水の循環と水利用

地球上に存在する水の量は、およそ 14 億  $\text{km}^3$  であるといわれている。そのうちの約 97.5% が海水等であり、淡水は約 2.5% である。この淡水の大部分は南・北極地域などの氷や氷河として存在しており、地下水や河川、湖沼などの水として存在する淡水の量は、地球上の水の約 0.8% である。さらに、この約 0.8% の水のほとんどが地下水として存在し、河川や湖沼などの水として存在する淡水の量は、地球上に存在する水の量のわずか約 0.01%、約 0.001 億  $\text{km}^3$  にすぎない（図 1-1-1、参考 1-1-1）。



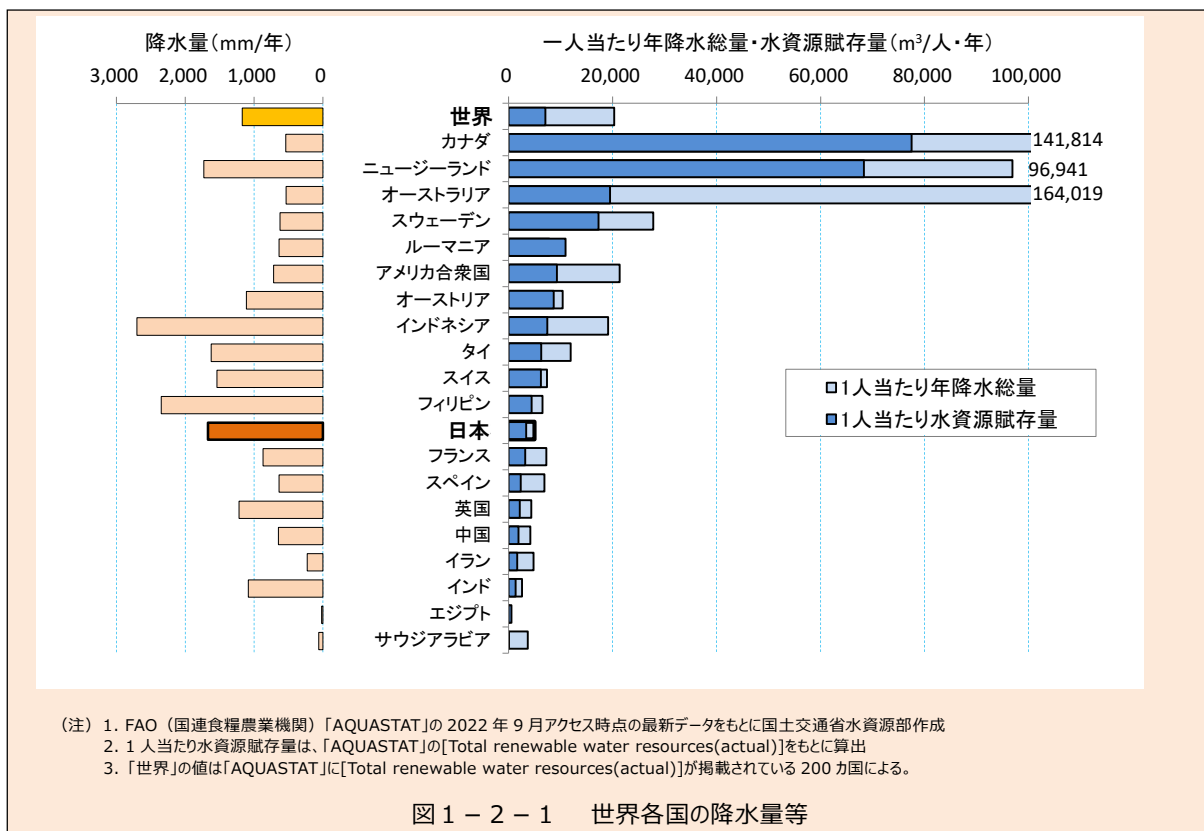
## 2 降水量

我が国は、世界でも有数の多雨地帯であるモンスーンアジアの東端に位置し、年降水量は約1,707mmとなっている。これは、世界（陸域）の年降水量である約1,171mmの約1.5倍となっている。一方、年降水量に国土面積を乗じ全人口で除した一人当たり年降水総量で見ると、我が国は約5,000m<sup>3</sup>/人・年となり、世界の一人当たり年降水総量約20,000m<sup>3</sup>/人・年の4分の1程度となっている（図1-2-1、参考1-2-1、参考1-3-2）※。

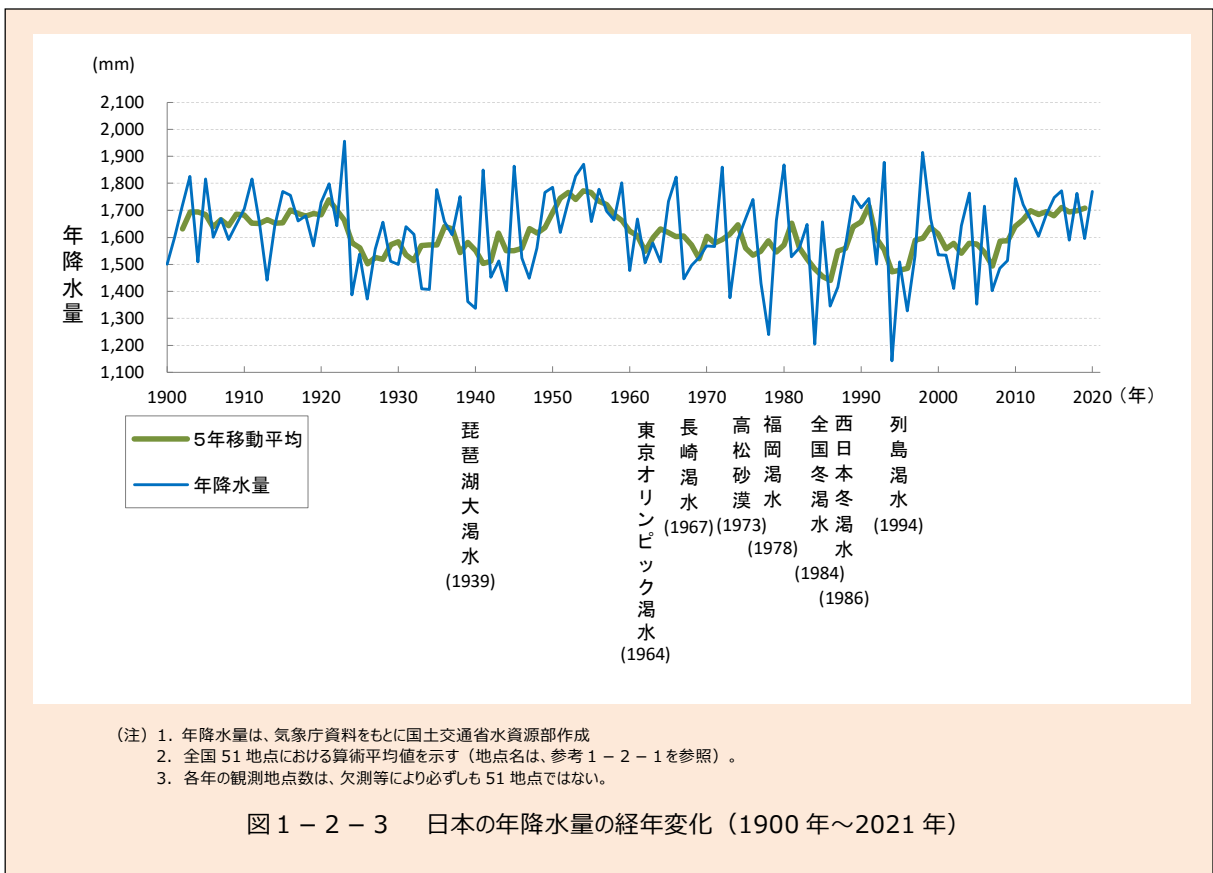
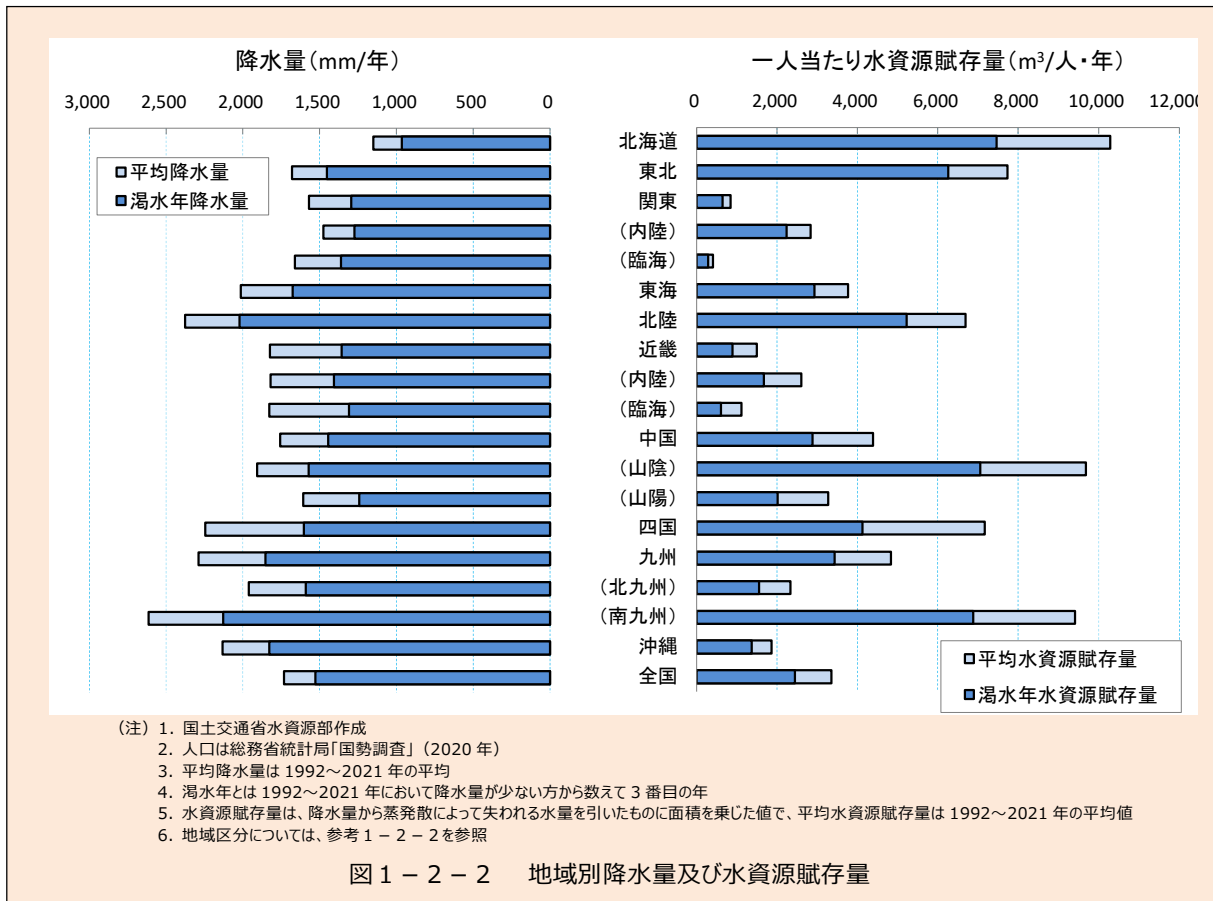
降水量を地域別にみると、北海道、東北、関東内陸、関東臨海及び山陽で全国平均を下回っている。一方、北陸、東海、近畿内陸、近畿臨海、山陰、四国、北九州、南九州及び沖縄で全国平均を上回っている（図1-2-2、参考1-2-2）。

令和3年（2021年）の我が国の年降水量（全国51地点の平均）は約1,825mmであった（参考1-2-1）。

年降水量（全国51地点の平均）の経年変化をみると、昭和40年頃（1965年頃）から少雨の年が多くなっており、48年（1973年）、53年（1978年）、59年（1984年）、平成6年（1994年）、8年（1996年）及び17年（2005年）は年降水量が年平均値を大きく下回っている。日本の年降水量には、統計的に有意な長期変化傾向は見られないが、統計開始から1920年代半ばまでと1950年代、2010年代に多雨期がみられ、1970年代から2000年代までは年ごとの変動が比較的大きかった（図1-2-3）。



※ 日本の年降水量は平成24年から令和3年（2012年から2021年）までの全国51地点における気象庁観測値をもとに、国土交通省水資源部で算出（地点名は参考1-2-1を参照）  
 世界（陸域）の年降水量は、FAO（国連食糧農業機関）「AQUASTAT」公表データ（参考1-3-2）を用いている。



### 3 水資源賦存量

#### (1) 水資源賦存量

我が国の平成4年から令和3年（1992年から2021年）までの30年間の水資源賦存量（水資源として、理論上人間が最大限利用可能な量であって、日本の場合は降水量から蒸発散量を引いたものに当該地域の面積を乗じて求めた値。）の平均（以下、「平均水資源賦存量」という。）は、約4,300億m<sup>3</sup>/年である（図1-3-1、参考1-2-2、参考1-3-1）。また、上記期間における10年に1度程度の割合で発生する少雨時の水資源賦存量を地域別に合計した値（以下、「渇水年水資源賦存量」という。）は約3,300億m<sup>3</sup>/年であり、平均水資源賦存量の約78%となっている。

平均水資源賦存量に対する渇水年水資源賦存量の割合は、日本全体の値である約78%に比べて北海道、関東（臨海）、近畿、中国、四国、九州や沖縄では小さく、東北、関東（内陸）ではやや大きくなっている。一人当たり水資源賦存量をみると、平均水資源賦存量、渇水年水資源賦存量ともに、関東、近畿、山陽、北九州及び沖縄では日本全体の値に比べ小さく、北海道、東北、東海、北陸、山陰、四国及び南九州では大きくなっている（図1-2-2、参考1-2-2）。

また、FAO（国連食糧農業機関）「AQUASTAT」の公表データより、一人当たり水資源賦存量を海外と比較すると、世界平均である約7,100m<sup>3</sup>/人・年に対して、我が国は約3,400m<sup>3</sup>/人・年と2分の1以下であり、首都圏だけで見ると北アフリカや中東諸国と同程度である（図1-2-1、参考1-3-2、参考1-3-3）。

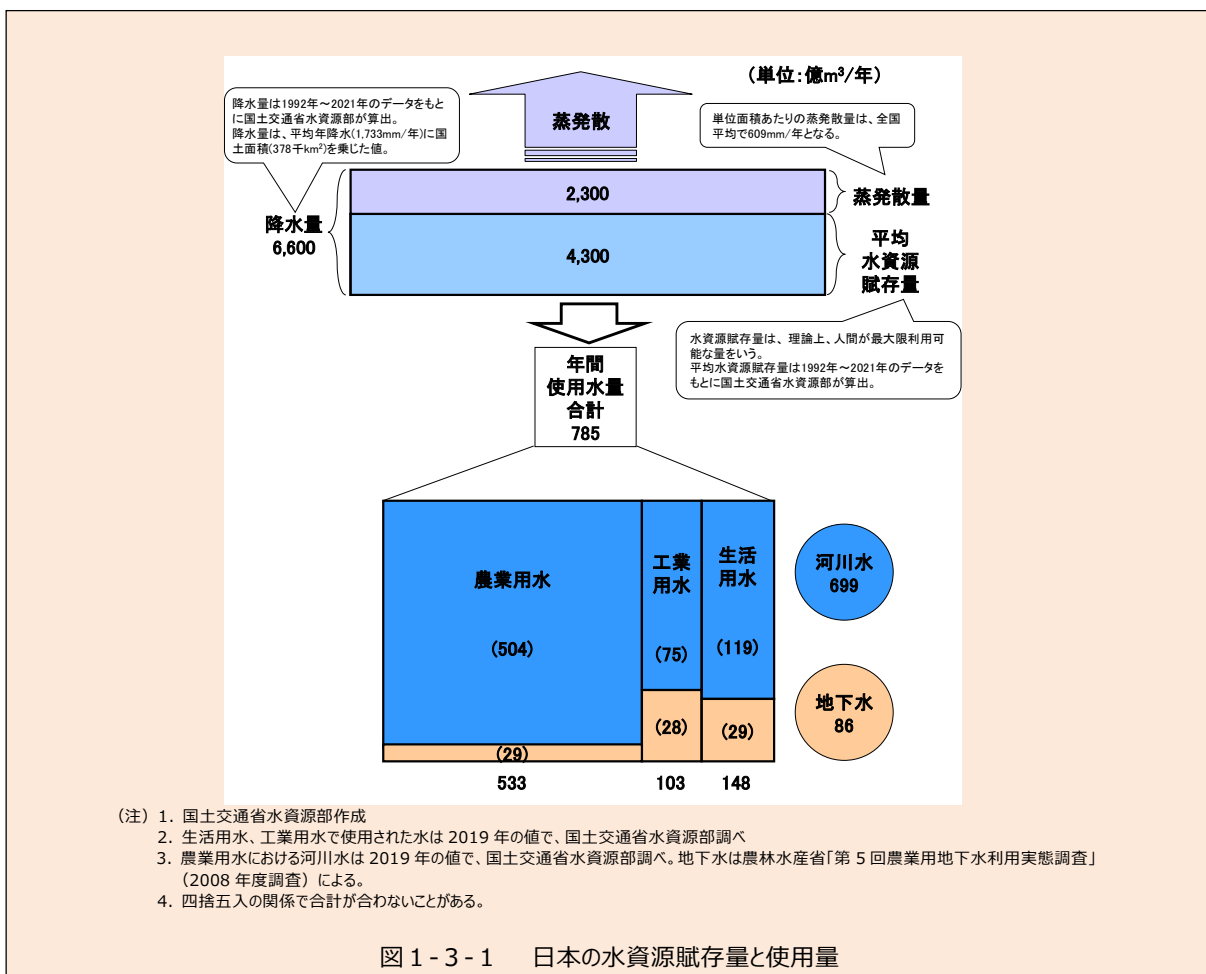


図1-3-1 日本の水資源賦存量と使用量

## (2) 渇水年の水資源賦存量

昭和31年から令和2年(1956年から2020年)までの65年間の降水量の実測値によると、渇水年水資源賦存量は過去から一旦減少し、回復傾向にある(図1-3-2)。例えば、平成13年～令和2年(2001年～2020年)の20年間の4年に1度程度の割合で発生する少雨の状況(20年間で5番目に少ない年)は、昭和31年～50年(1956年～1975年)のそれとおおむね同等となっている。

